（公表の参考様式）

別添１

令和５年３月３１日

令和４年度　特別の教育課程の実施状況等について

石川県		
カリキュラム開発拠点校	管理機関名	設置者の別
金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属高等学校	国立大学法人金沢大学	国立

※教育課程の特例を活用していないが、令和４年度の実施状況等を以下に記載。

１．特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

カリキュラム開発拠点校	自己評価結果の公表	学校関係者評価結果の公表
金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属高等学校		

※結果公表に関する情報について、ウェブ上で公開している場合は公開しているウェブページの URL を記入すること。ウェブ以外で公開している場合は、公開している情報を閲覧できる場所・方法等を適宜記入すること。

２．特別の教育課程の内容

（１）特別の教育課程の概要

本構想は，北陸圏域の高等学校，海外の高等学校，関連する機関により「北陸 AL ネットワーク」を形成し，組織的・継続的に“持続可能な世界を実現し，Society5.0 を牽引するグローバル・リーダー”を育成するものである。

拠点校において実施してきたスーパーグローバルハイスクール事業の課題探究型課程をベースに，国内外の連携校等における取組や各校が立地する地域の異なる経済・文化・歴史等の社会的背景も含めた多様な視点，協働機関による専門的視点からの指導等を取り入れることにより，教育カリキュラムを深化させる。さらに，高校生の段階から金沢大学が有する海外ネットワーク等も活用した国際性と，アドバンスト・プレイスメントによる高い知識を身に付けさせる取組を加え，社会が抱える複雑な課題に立ち向かう“新たなグローバル・リーダー”育成モデルを確立し，広く全国へと発信する。

（２）学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

北陸コンソーシアムの構築と高大接続の価値

ミライシコウ金沢という機会によって，北陸の中で最もアカデミックな存在である金沢大学に，15 校総勢 200 人の高校生が集まり，探究について議論を深め，国際会議によって議論を深めることができた。会場も金沢大学の中で行い，18 人の助言者のうち 10 人が

金沢大学の大学教員であり，幅広い専門分野をもつ金沢大学ならではの高い学術性を魅力として，多くの高校生が集まった。これによって，より深い学びが２つの意味で実現することができた。１つは，地域を超え，学校種を超え，異文化な背景を持つ様々な学校が交わり，他の学校から学び，自分の学校の良さを知ることで，学校の学びが深まる意義である。もう１つは，高大接続の学びである。入試による高大接続ではなく，在学中の高校1年生や２年生を対象に，探究で学んだことをより深く見る視点を共有することで，より生徒たちがエンカレッジされ，在学中に更に深い学びに向かっていく機会を得ることである。

（３）特例の適用開始日

平成３１年４月１日

（４）取組の期間

令和５年３月３１日まで

３．特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

（１）特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ○計画通り実施できている
- 一部、計画通り実施できていない
- ほとんど計画通り実施できていない

（２）実施状況に関する特記事項

※（１）で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

（３）保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ○実施している
- 実施していない

＜特記事項＞

１１月に，研究大会を開催し，全国の教育関係者を対象に，本 WWL 事業の取り組みを公開した。参加した外部からの教育関係者は，100 人を超え，県内はもちろん全国から多くの方に参加していただいた。その中で，取り組みの意義と価値，また現状の課題についてまとめ発表した。また，生徒たちの探究ゼミでの活動報告も行った。

２月には，「学びの共有の日 2nd」と題して，1 年生 2 年生を対象に，ほぼ全ての生徒が

発表した。また，他者の発表を聞き，質疑応答によって，お互いの学びを深める活動を行った。その際に，保護者あるいは金沢大学附属中学校に案内し，発表を公開した。

４．　実施の効果及び課題

（１）特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

学校の教育目標として，「グローバルに活躍できる異才を育成する」とある。この異才とは，まさに，探究において，「自己を知り，自己を鍛える」という目的の達成，即ち，自分ならではの特性を見つけ，それを深めることである。

しかし，そこには，課題が２つある。１つは，そもそも自分ならではの特性を見つけられていない生徒も少なくないことがあげられる。本当の意味で，一人一人が自分のキーワードをもつほど，強烈な個性をもって探究を進めることができたとは言い難い。理想を言えば，240 人いれば，240 通りの探究があることが望ましい。もう一つは，探究の深まりである。仮に良い課題を設定できていたとしても，探究が上手くいかず，行き詰ることも少なくなかった。時間が少ないという要因もあるが，もっとも大きな要因は，探究ゼミが初年度であったことがあげられる。各ゼミの先生方も先を見通せず，試行錯誤の１年であった。今後，より一層の発展が見込める。

（２）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

中学校までの知識や技能を用いて，生徒の個性に応じて，興味や関心を深め，探究的な学びを通して，より専門的な知識・技能及び社会性や批判的思考力を涵養している。

５．課題の改善のための取組の方向性

探究ゼミの初年度を終えたことで，１年間のサイクルを１度経験することができた。一人一人の教員にとって，これは財産である。これによって，より一人一人の生徒たちが内在的に持つ課題の種を芽吹かせることができるようになる。学校全体として，より生徒が潜在的にもつ特性を磨く方向へ，探究ゼミの取り組みを改善していく予定である。